

モラルディレンマとマーカスの定義について

澤崎 高広

はじめに

本稿の目的は、R. B. マーカスが道徳体系の整合性の適切な定義として提示したものが、モラルディレンマと呼ばれる状況が存在することの不可能性を示そうとする様々な議論全体とどのような関係にあるのかを明確にすることである。そのために、まず第一節で本稿においてモラルディレンマというものがどのような状況として考えられているのかを述べ、つぎに第二節と第三節でそのモラルディレンマが存在する可能性を否定しようとする論者たちの動機と議論をそれぞれ確認する。そして、第四節で整合性に関するマーカスの定義の内容を確認し、最後に第五節で彼女の提案とモラルディレンマ否定論者たちの動機および議論に対する関係を明確にする。

一. モラルディレンマとはなにか

モラルディレンマとは、 a という行為が道徳的になされるべきであり、かつ b という行為も道徳的になされるべきであるのに、 a と b が両立しえない状況のことである。これは、標準的な義務論理の言語に様相オペレータを付け加えたもの（以下、SDL+）で記号化すると、 $OA \wedge OB \wedge \neg \Diamond(A \wedge B)$ で表される。モラルディレンマとみなすことができる状況としては、たとえばプラトンの『国家』に出てくる、怒り狂った友人から武器を借りている人の状況が挙げられる（『国家』, 331C）。このとき、友人から武器を借りている人は借りた物を返す義務をもつと同時に、怒り狂った友人に武器を渡さないようにする義務をももつが、両方の義務に従うことはできないから、モラルディレンマに陥っていると言える。また、別の例としては、小説『ソフィーの選択』の中のソフィーの選択が

しばしば挙げられる(スタイロン[1991], pp. 431-8). ポーランド人のソフィーは、第二次世界大戦中、二人の子供とともにアウシュビッツ強制収容所へ送られる道中で酔っ払ったナチスの軍医から「選別」を受けることになってしまう。そして若干の問答の後、軍医が気まぐれに言い放ったのは子供のうち一人は残してよいということだった。このとき、ソフィーはたしかにモラルディレンマに陥っているように見える。

ここでモラルディレンマの理解に関して二点注意しておきたい。

まず、一点目はモラルディレンマに現れている二つの義務は同程度の強制力をもつか、あるいは比較不可能な強制力をもつとしばしば想定されているという点である。それゆえ、たとえば論者によっては先のプラトンの例はモラルディレンマとは認めない可能性がある。なぜなら、この例において人がなすべきことは明らかに武器を返さないことであると考えられるからである。これに対して、ソフィーの選択の例はこの条件も満たしていると言える。

二点目は、モラルディレンマに付きまとう悲惨さはモラルディレンマの成立にとって無関係な要素であるという点である。たとえば、先の規定に従えば、同程度に大切にしている二人の友達のそれぞれと同日同時刻に違う店へ飲みに行く約束をしてしまっている状況もモラルディレンマであることになる。また反対に、たとえばもし適切な道徳体系が五人を殺すことよりも一人を殺すことのほうがよいとしているなら、トロッコ問題の状況に置かれている人はどれほど悲惨な目に合っていようとモラルディレンマには陥っていないことになる。

二. モラルディレンマ否定論者の動機

以上述べてきたモラルディレンマという状況は少なくとも直観的には存在するように見える。しかしながら、義務論や功利主義といった伝統的な倫理学の体系はいずれもこうした状況が存在する可能性を否定してきた。たとえば J. S. ミルは「... [善や悪を決定するような] スタンダードはどのようなものであれ、ただ一つのものしか存在しえない。というのも、もし行為の究極的な原理がいくつか存在するとしたら、同じ行為がある原理によって是認され、なおかつ他の原理によって非難されるということがありうるからである。そして、こ

これらの原理を審査するものとして、より一般的な原理が要求されることになるだろう」(Mill[1987], p. 52)と述べてモラルディレンマの可能性を否定している。

では、哲学史上の倫理学者たちがこのように考えてきたことの動機は何であろうか。そのような動機として、少なくとも以下の二つを挙げることができると思われる¹。

まず一つは、モラルディレンマが存在するといかなる道德体系も何らかの意味で不整合であることから免れえなくなるようにみえるから、というものである。このように考えられることがあるのは、モラルディレンマの存在が実際のところある行為が一つの道德体系によって義務づけられると同時に禁止されることがあるということの意味するからである。そして、もう一つは、モラルディレンマが存在するといかなる道德体系もある場面においては行為を一意的に決定することができないことになるようにみえるから、というものである。というのも、道德的衝突が存在するという事は、両立できない二つの行為が一つの道德体系によって義務として指定されうるということを意味するからである。

したがって、この診断が間違っていなければ、モラルディレンマ否定論者は総じて道德の完璧さでも呼ぶべきものを放棄したくないがゆえにモラルディレンマの存在の可能性を否定している、と言うことができるであろう²。

三. モラルディレンマ否定論者の議論

以上のような動機をもつモラルディレンマ否定論者は、その存在の不可能性を主張するために、少なくとも以下の四つの議論を行なうことができる。

まず、第一の議論は、ある適切な道德体系はあらゆる義務を完璧に序列化しているからモラルディレンマが存在する可能性はない、という議論である。この議論は特定の誰かによってなされたというよりも、モラルディレンマの存在の可能性を否定しようとする際に誰もが自然に行なう議論であると言える。

つぎに、第二の議論は、適切な道德体系において採用されている道德原理から二つの両立できない行為がそれぞれ義務に指定されることはありうるが、そのような場合には直観に従うことによって正しい道德的判断を下すことができ

るからモラルディレンマが存在する可能性はない、という議論である。この種の議論はたとえば W. D. ロスによって行われている。

そして、第三の議論は、モラルディレンマが存在すると仮定すると SDL+において論理的矛盾が得られてしまうからモラルディレンマは存在しえない、という議論である。この議論は大きく分けて二種類の仕方で行われる³。一つは、集成の原理 (Aggregation principle) と呼ばれる $\text{Agg} \lceil (O\phi \wedge O\psi) \rightarrow O(\phi \wedge \psi) \rceil$ と、べきならでできるの原理 (Ought-Implies-Can principle) と呼ばれる $\text{Can} \lceil O\phi \rightarrow \Diamond\phi \rceil$ を用いて、次のように構成される⁴。

証明 A :

- | | | |
|-----|---|--------------------------|
| (1) | OA | (仮定) |
| (2) | OB | (仮定) |
| (3) | $\neg\Diamond(A \wedge B)$ | (仮定) |
| (4) | $\neg\Diamond(A \wedge B) \rightarrow \neg O(A \wedge B)$ | (Can の例化と対偶より) |
| (5) | $\neg O(A \wedge B)$ | ((3)(4)と MP より) |
| (6) | $OA \wedge OB$ | ((1)(2)と \wedge の規則より) |
| (7) | $(OA \wedge OB) \rightarrow O(A \wedge B)$ | (Agg の例化より) |
| (8) | $O(A \wedge B)$ | ((6)(7)と MP より) |
| (9) | $O(A \wedge B) \wedge \neg O(A \wedge B)$ | ((5)(8)と \wedge の規則より) |

■

もう一つは、分配の原理 (Distribution principle) と呼ばれる $\text{Dist} \lceil \Box(\phi \rightarrow \psi) \rightarrow (O\phi \rightarrow O\psi) \rceil$ と、無衝突の原理 (No conflicts principle) (あるいはたんに D 公理) と呼ばれる $D \lceil O\phi \rightarrow \neg O\neg\phi \rceil$ を用いて、次のように構成される。

証明 B :

- | | | |
|-----|--------------------------------|-------------------------|
| (1) | OA | (仮定) |
| (2) | OB | (仮定) |
| (3) | $\neg\Diamond(A \wedge B)$ | (仮定) |
| (4) | $\neg\neg\Box\neg(A \wedge B)$ | ((3)と \Diamond の定義より) |

- (5) $\Box(A \rightarrow \neg B)$ ((4)と二重否定除去則, \rightarrow の定義より)
 (6) $OA \rightarrow O\neg B$ ((5)と Dist より)
 (7) $O\neg B$ ((1)(6)と MP より)
 (8) $\neg O\neg B$ ((2)と(D)の例化より)
 (9) $O\neg B \wedge \neg O\neg B$ ((7)(8)と \wedge の規則より)

■

これらの証明はたしかに, SDL+に従うならばモラルディレンマが存在することはありえないということを示している. なぜなら(1)から(3)の仮定から (どちらも(9)のところで) 論理的矛盾が導出されているために, 背理法により(1)から(3)のうちのいずれかが偽でなければならなくなるからである. これは疑いなくモラルディレンマを構成している条件のうち少なくとも一つが成り立たないということを示している.

最後に, 第四の議論として, モラルディレンマが存在すると仮定すると SDL+において義務の爆発 (deontic explosion) が得られてしまうからモラルディレンマは存在しえない, という議論がある. 義務の爆発とは, ひとたびモラルディレンマが生じるとあらゆる命題が義務になるという事態のことである. これが成立すると, たとえばいま私がなんらかのモラルディレンマに陥っていれば読者が本稿を絶賛することが義務になってしまう. この結果は具体的には次のようにして得られる⁵.

証明 C :

- (1) OA (仮定)
 (2) OB (仮定)
 (3) $\neg \Diamond(A \wedge B)$ (仮定)
 (4) $\neg \neg \Box \neg(A \wedge B)$ ((3)と \Diamond の定義より)
 (5) $\Box(A \rightarrow \neg B)$ ((4)の変形)
 (6) $OA \rightarrow O\neg B$ ((5)と Dist より)
 (7) $O\neg B$ ((1)(6)と MP より)
 (8) $\Box(B \rightarrow (B \vee C))$ (体系 K の定理)

- (9) $OB \rightarrow O(B \vee C)$ ((8)と Dist より)
 (10) $\Box(\neg B \rightarrow (\neg B \vee C))$ (体系 K の定理)
 (11) $O\neg B \rightarrow O(\neg B \vee C)$ ((8)と Dist より)
 (12) $O(B \vee C)$ ((2)(9)と MP より)
 (13) $O(\neg B \vee C)$ ((7)(11)と MP より)
 (14) $O(B \vee C) \wedge O(\neg B \vee C)$ ((12)(13)と \wedge の規則より)
 (15) $O((B \vee C) \wedge (\neg B \vee C))$ ((14)と Agg より)
 (16) $O((B \wedge \neg B) \vee C)$ ((15)と分配律より)
 (17) OC ((16)と $\varphi \leftrightarrow \varphi \vee \perp$ より)

■

(17)に現れている C は任意の命題でよいから、この証明はたしかに義務の爆発を表していると言える。

四. マーカスによる道徳体系の整合性の定義

こうした議論状況の中、マーカスはモラルディレンマの存在を認める立場から、一般に整合性の概念がその要素すべてが真になることが可能であるような命題の集合の性質として定義されることを引き合いに出して、道徳体系の整合性は次のように定義されるべきであると主張した。

われわれはルールを集合を、もしそれらのルールがすべて従いうるある可能世界が存在するならば整合的である、と定義する。(Marcus[1996], p. 26.)

ルールが集合が整合的でないのは、それらのルールすべてが満足しうるいかなる可能世界も存在しない場合である。(Marcus[1996], p. 27)

マーカスがこの主張によって強調したのは、モラルディレンマの存在は道徳体系が不整合であることの証拠とはならない、ということである。このことを十分に理解するために、マーカスが提示した二人の愚かなトランプゲームの例

を見てみよう (Marcus[1980], pp. 128-9). まず, シャッフルされた後に半分に分けられた二つのカードの山が二人のプレイヤーの前にそれぞれ置かれているとする. 二人のプレイヤーはこの状態から, 黒のカード (スペード, クローバー) は赤のカード (ダイヤ, ハート) に打ち勝ち, 高い数字 (最高はエース) は低い数字に打ち勝つという二つのルールの下で (同じ色で同じ数字の場合は引き分けとする), カードの山が尽きるまでワンプレイごとに一番上のカードをひっくり返していく. そして, カードの山が尽きた時点でそれぞれが打ち勝った回数を計算し, その総計の多いほうを勝者とする. この単純なゲームは, 運がよければ最後まで進行したうえで勝者を決定することができる. しかし, たとえば一方のプレイヤーが赤のエースを引き, もう一方のプレイヤーが黒の2を引いてしまった場合にはゲームが進行しなくなる. というのも, このワンプレイをどのように処理しても先の二つのルールのどちらかに背いてしまうことになるからである. それゆえ, この状況は二つのルールは成り立っているが両方が満たされることはない状況であると言える. しかし, それにもかかわらず, 先の整合性の定義に従えばこのゲームのルールはまったく整合的に構成されることになる. なぜなら, たしかにこれら二つのルールが完全に満たされる可能世界, すなわちゲームが最後まで進行するケースが存在するからである.

マーカスの定義に従えば, モラルディレンマに対する道德体系の関係は, 進行不可能なケースに対するこのゲームの関係と同じである. モラルディレンマが存在するということはたしかに道德体系における道德原理のすべてがつけねに満たされるわけではないということの意味するが, しかし道德体系が整合的でないということまでは意味しないのである.

五. マーカスの定義とモラルディレンマ否定論の関係性

上述したように, マーカス自身はモラルディレンマの存在を認める立場に立っていた. では, マーカスによる道德体系の整合性の定義はモラルディレンマの存在の可能性を否定する論者たちの動機と議論に対してどのような関係にあるのか.

まず, 一つ目の動機, すなわちモラルディレンマの存在を認めるといかなる

道德体系も何らかの意味で不整合であることから免れえなくなるようにみえるという動機に対しては、マーカスの定義はそれを解消するという関係にある。なぜなら、前節で見たように、マーカスによる道德体系の整合性の定義を採用するなら、モラルディレンマの存在が道德体系を不整合にすることはないからである。

しかし、二つ目の動機、すなわちモラルディレンマの存在を認めるといかなる道德体系もある場面においては行為を一意的に決定することができなくなるようにみえるという動機に対しては、マーカスの定義は明らかに何の影響も与えない。というのも、道德体系の整合性がどのように定義されようとも、モラルディレンマの存在、すなわち両立できない二つの行為が一つの道德体系によってそれぞれ義務として指定される状況の存在が道德体系から行為の一意的決定性を奪ってしまうことには変わりはないからである。

したがって、マーカスの定義に従うことは道德体系の完全さに訴える第一の議論と直観による道德判断の正しさに訴える第二の議論に応答する必要性を低下させる、と言える。なぜなら、第一の議論も第二の議論も上の二つの動機があるからこそわざわざ展開されている議論であって、マーカスの定義はその二つの動機のうちの一つをモラルディレンマ否定論者から奪い去ってしまうからである。ただし、この定義は二つ目の動機に対しては何の影響も与えないから、あくまで第一の議論と第二の議論に対して応答する必要性を低下させるだけである。

最後に、SDL+による矛盾に訴える第三の議論とSDL+による義務の爆発に訴える第四の議論に関しては、マーカスの定義はこれらへの応答の必要性を低下させない。というのも、第三の議論と第四の議論は実のところ、モラルディレンマ否定論者の動機とは関係なしにモラルディレンマの存在の可能性を認めようとするマーカスらの立場の壁となるからである。事実、モラルディレンマの存在の可能性を認めようとする論者たちの多くは第三の議論と第四の議論に応答するべくSDL+の改訂を試みている⁶。

結論

本稿では、マーカスが道徳体系の整合性の適切な定義として主張したものがモラルディレンマの存在の不可能性を示そうとする様々な議論全体とどのような関係にあるのかという問題について考察を行なった。

その結果明らかになったことは、ある道徳体系が整合的であることをそのルールがすべて満足されるある可能世界が存在することとして定義するマーカスの戦略は、モラルディレンマ否定論者が抱きうる二つの動機のうち一つを解消する一方でもう一つの動機はそのままにし、また第一の議論と第二の議論に対する応答の必要性を低下させる一方で第三の議論と第四の議論に対する応答の必要性は低下させない、ということである。

それゆえ、この結果からわれわれはさらに、仮にマーカスのように道徳体系の整合性を定義するとしてもモラルディレンマの存在の可能性を認めるためにはこれだけでは不十分である、とすることができる。換言すれば、もしモラルディレンマの存在の可能性を認めようとするならば、われわれはマーカスの定義を採用したうえで、道徳体系が行為の一意的決定性をもたなくてよいことを論じつつ SDL+を改訂する必要がある、ということになる。

註

- ¹ この二つを動機とみなすことについては McConnell[2014, §4]に従っている。
- ² ただし、一般にモラルディレンマの存在の可能性を否定する立場として認識されているモラルディレンマに関する選言説 (e.g. Brink[1994]) はいかなる道徳体系にも行為の一意的決定性を認めないため、この立場に関してはいま述べた道徳の完璧さを部分的に放棄していると考えるべきである。
- ³ 本文の以下の論述は Goble[2009, pp. 450-1]を参考にしたが、証明と用語に関して若干手を加えてある。
- ⁴ ただし、以下で MP はモードゥス・ポネンスを表し、 $\diamond\phi$ は $\neg\Box\neg\phi$ で定義されるものとする。
- ⁵ 義務の爆発を導出するだけなら本稿で示されているような回りくどいやり方に従う必要はない。というのも、単純に先の証明 A か証明 B の(9)を用いて任意の命題を導出することができるからである。しかし本稿では第三の議論と第四の議論を別のものとして扱うために、Goble[2009, p. 482, fn.16]を参考にして論理的矛盾を経由せずに義務の爆

発を示しておいた。

- ⁶ 初期の試みとしては、Lemmon[1962], Williams[1965], van Fraassen[1973]などがある。

参考文献

- Brink, D. O. [1994], “Moral Conflict and its Structure”, *The Philosophical Review*, vol. 103, 2, pp. 215-247.
- Goble, L. [2009] “Normative Conflicts and the Logic of ‘Ought’”, *Noûs*, 43, pp. 450-489.
- Lemmon, E. J. [1962] “Moral Dilemmas,” *The Philosophical Review*, Vol. 71, No. 2, pp. 139–58.
- Marcus, R. B. [1980] “Moral Dilemmas and Consistency”, *The Journal of Philosophy*, vol. 77, 3, pp. 121-136.
- , [1996] “More about Moral Dilemmas”, in Mason, H. E. ed. *Moral Dilemmas and Moral Theory*, New York: Oxford University Press, Chap. 2, pp. 23-35.
- McConnell, T. [2014], "Moral Dilemmas", *The Stanford Encyclopedia of Philosophy*, Edward N. Zalta (ed.), URL = <<http://plato.stanford.edu/archives/fall2014/entries/moral-dilemmas/>>.
- Mill, J. S. [1987] “Utilitarianism and Moral Conflicts,” in Gowans, C. W. ed. *Moral Dilemmas*, New York: Oxford University Press, Chap. 2, pp. 52–61.
- van Fraassen, B. C. [1973] “Values and the Heart’s Command,” *The Journal of Philosophy*, Vol. 70, No. 1, pp. 5–19.
- Williams, B. A. O. [1965] “Ethical Consistency,” *Proceedings of the Aristotelian Society*, Vol. 39(supplement), pp. 103–24.
- スタイロン, W. [1991] 『ソフィーの選択 (下)』(大浦暁生訳), 新潮社.
- プラトン [1979] 『国家』(藤沢令夫訳), 岩波書店.